

井波別院瑞泉寺と周辺地域の信仰—聖徳太子信仰を中心として—

松金直美
(真宗大谷派教学研究所)

1. 2021年聖徳太子1400回忌を契機とする聖徳太子研究の進展

【「地域真宗史フィールドワーク報告 富山県西部における聖徳太子信仰」『真宗』2020年2月号】
…「はじめに」

- ・ 教学研究所編『教化研究』第166号「特集 聖徳太子」（真宗大谷派宗務所、2020年）
- ・ 東館紹見監修・真宗大谷派教学研究所編『はじめて読む 浄土真宗の聖徳太子』（東本願寺出版、2021年）

→その一環として、「井波瑞泉寺とその周辺地域」の「近世近代における聖徳太子信仰の展開」を研究¹。

2. 井波別院瑞泉寺の由来と法宝物

■『勅願所 瑞泉寺由来略記』正徳3（1713）年刊²

井波瑞泉寺（井波別院瑞泉寺、富山県南砺市）は明徳元（1390）年に後小松天皇の勅願所として、本願寺5世綽如上人（1350～93、在職1375～93）によって建立されたと伝えられる。朝廷に異国から難解な手紙が届いた際、碩学の仏者や儒者の誰も読めなかったところ、綽如上人が誤りなく読み、それに対して執筆した返書もすばらしかったため、天皇は感嘆した。さらに『大無量寿経』を進講し、その功績によって、聖徳太子二歳像（以下「太子二歳像」と略す）と聖徳太子絵伝八幅（以下「太子絵伝」と略す）が授与された。そして綽如上人は越中国山斐郷に寺院を創建

¹ 拙稿「近世近代における聖徳太子信仰の展開——井波別院とその周辺地域——」（教学研究所編『教化研究』第166号「特集 聖徳太子」（真宗大谷派宗務所、2020年）

² 宇野柏里『井波誌』町立井波図書館館友会、1937年、31～33頁。なお、天正初年成立とみられる実悟著述の『蓮如上人塵拾鈔』（『蓮如伝』大系真宗史料伝記編5、法藏館、2009年、33～34頁）や、瑞泉寺第五代賢心の1549（天文18）年8月9日付『賢心物語』（『富山県史』史料編Ⅱ中世、富山県、1970年、64～69頁）に同様の逸話がある。

したいと申し出て勅許された。仏閣造立の際に霊水が涌出したため、「瑞泉寺」という寺号が許され、勅願所となった。

■聖徳太子二歳像（井波瑞泉寺所蔵）の縁起³

2歳の太子は2月15日暁に、乳母である玉照姫の懐から這い出て、東方に向かい「南無仏、南無仏、南無仏」と3遍唱えた。これが本朝における仏法弘通念仏の称え始めである。雪のような肌に緋の袴をはいたその姿を末世に留めようと、推古天皇の命によって太子は、32歳の時に「三河国霧降山」（所在不明）にある49丈の霊木で自ら彫刻した。それを後小松天皇から綽如上人へ授与されたものが瑞泉寺に伝来する太子二歳像という。

■聖徳太子絵伝（井波瑞泉寺所蔵）の概要

8幅からなる瑞泉寺の太子絵伝は、平安前期の絵師である巨勢金岡^{こせのかなおか}の作と伝えるが、作風から南北朝時代（14世紀）の制作とみられる。太子の事蹟が91場面に描かれており、太子伝会（後述）での絵解きに用いられてきた⁴。

3. 井波瑞泉寺の歴史と性格

■中世の井波瑞泉寺に参詣した赤尾の道宗

【『蓮如上人御一代記聞書』に学ぶ（第25回）—第45条—】
cf.)文明元（1469）年7月28日付親鸞聖人御影（井波別院瑞泉寺所蔵）

■井波瑞泉寺の性格

- ・ 綽如上人による開基という格式を誇る井波瑞泉寺の住職は代々、本願寺歴代の子息・猶子（擬制的親子関係）、あるいは連枝（兄弟）が就任した⁵。
- ・ また同寺は本願寺の東西分派後、当初は古国府勝興寺（高岡市伏木古国府）と同様に西派であったが、勝興寺との不和によって慶安2（1649）年6月に東派へ改派した。
- ・ そして同年10月には、井波瑞泉寺と城端善徳寺（真宗大谷派城端別院善徳寺、南砺市城端）が共に越中国における東派の触頭に任じられた。
…このように幕府・藩あるいは東本願寺からの諸事を支配下へ伝達する触頭役を、1カ月交代で相互に務めることとなった⁶。

³ 「聖徳太子尊像御縁起」明治6（1873）年11月以降制作（宇野柏里『井波誌』町立井波図書館館友会、1937年、62頁）。

⁴ 『聖徳太子伝の世界一えがかれた和国の教主—』（大谷大学博物館、2008年）54～57、72頁。

⁵ 「瑞泉寺系譜」（宇野柏里『井波誌』町立井波図書館館友会、1937年、のちに『越中真宗史料越中資料集成 別巻1』桂書房、1997年へ転載）。

⁶ 『井波町史』上巻（井波町、1970年）706頁。

- * 井波御坊・城端御坊とも称した両寺は、同国における真宗東派の寺院支配を担った。
- * 一方で御坊での諸行事には、手次寺を介さずに門徒が関わることもあり、真宗の他派門徒が参加する場合もみられた。
- …本末制や寺檀制といった制度とはまた異なる繋がりを生み出す地域真宗の結節点でもあったのである⁷。

4. 太子 1200 百回忌と太子堂建立

- ・ 現在の井波瑞泉寺は、本堂と太子堂からなる両堂形式であるが、もともとは本堂のみであった。宝暦 12 (1762) 年 4 月 29 日に火災に見舞われたものの、安永 3 (1774) 年に本堂が再建され、その後、座敷や山門などの再建も順次進められていった⁸。享和 3 (1803) 年初版の『二十四輩順拝図会』前編卷之 3 には、太子堂建立前の境内と門前町の俯瞰図が描かれている⁹。
- ・ 文政 2 (1819) 年 8 月 4 日には、東本願寺から堂僧¹⁰の西宗寺に対して、8 月 19 日から三昼夜執行される井波御坊での聖徳太子 1200 回忌へ使僧として派遣すると命じられている¹¹。つまり同年に太子 1200 回忌の法要が執行されたとみられる。
- ・ 天保 14 (1843) 年には費用の助成のため、2 月 18 日から 28 日まで、学寮講者の開悟院靈暉 (1775~1851、円満寺〈富山県中新川郡上市町〉) が法話をしている。そして同年 5 月 10 日に、太子堂新始の儀式が執行された。建築開始を目前に控えて、越中国出身の学寮講者による法話で勧募したようだ¹²。
- ・ また弘化 3 (1846) 年 11 月には、井波瑞泉寺家司 2 名から越中国射水郡葛葉村 (富山県氷見市葛葉) の同行中へ宛てて、太子堂造立志請取状が発行されている¹³。太子堂を造立するための懇志は、瑞泉寺周辺のみならず、より広い地域で募られたようだ。それは瑞泉寺の太子に対する信仰圏でもあろう。

⁷ 拙稿「浄土真宗」(佛教史学会編『仏教史研究ハンドブック』法藏館、2017 年)。

⁸ 「瑞泉寺誌」(宇野柏里『井波誌』町立井波図書館館友会、1937 年、37 頁、41~42 頁)。

⁹ 『二十四輩順拝図会』前編卷之 3「井波園」(『日本名所風俗図会』〈諸国の巻Ⅲ、角川書店、1980 年〉354 頁)。

¹⁰ 御堂衆・堂衆ともいう。真宗本山で法務を掌る僧侶。近世には洛中にある堂僧寺院の僧侶が務めた。その職務は多様で、本願寺における儀式・声明のみならず、近世前期には学寮の講者として教学を担い、また各地へ使僧や御坊輪番として赴くなど、近世を通じて教化活動にも従事した(拙稿「真宗寺院における建築・荘嚴の形成—洛中堂僧寺院を事例として—」『教化研究』第 158 号、2016 年)。

¹¹ 『諸国書状留』文政 2 年 8 月 4 日条(『東本願寺史料』第 1 冊、名著出版、1973 年、初出 1939 年)。

¹² 「瑞泉寺誌」「瑞泉寺太子伝会之来歴」(宇野柏里『井波誌』〈町立井波図書館館友会、1937 年〉50~51 頁、61 頁)。

¹³ 「名苗家文書」(『氷見市史 6 資料編 4 民俗、神社・寺院』氷見市、2000 年) 920 頁。

- ・そして弘化4(1847)年、ようやく太子堂が建立された。翌嘉永元(1848)年8月15日から22日まで太子1200回忌が執行されており、太子堂が新たに建てられたことで、改めて勤めたようである¹⁴。

5、太子伝会での絵解き

- ・太子伝会での絵解きは、弁才に勝れた瑞泉寺12世応現院真照(1695~1744)が、太子絵伝の虫干(以下、近世の記述では「太子絵伝虫干」と称する)に際して絵解きをしたことに始まるという。
- ・太子絵伝虫干は毎年、6月22日から28日までの日程であったが、宝暦6(1756)年には8月22日から28日までに変更されている。その後も日程は、6月あるいは8月のうちで一定しなかった¹⁵。大正中期以降は、7月21日から29日に実施され、太子信仰を伝える瑞泉寺を象徴する行事として、現在まで受け継がれている¹⁶。
- ・太子絵伝虫干には数多くの参詣者があり、その参詣者らを対象とした旅籠屋や露店の商売が行われた。また芝居役者や芸能者あるいは遊女も集まるたいへんにぎわった状況であったようだ。信仰のみならず娯楽の要素も多分に含んだ行事であり、人々を魅了した。

【「地域真宗史フィールドワーク報告 富山県西部における聖徳太子信仰」『真宗』2020年2月号】
 …「二、井波瑞泉寺の太子伝会」

6、東本願寺兩堂再建における尽力

- ・東本願寺は、江戸時代に4度の焼失に見舞われたが、その度に再建されてきた。天明8(1788)年1月30日、京都大火により東本願寺は類焼した。最初の焼失にあたる。再建に際しては、用材を全国から京都の東本願寺へ輸送する必要があった。
- ・東本願寺は再建の用材として、幕府から飛騨国(岐阜県)天領の材木を拝領した。
- ・飛騨国天領の材木は、白川郷(岐阜県大野郡白川村)から庄川を下って伏木湊(富山県高岡

¹⁴ 「瑞泉寺誌」「瑞泉寺太子伝会之来歴」(宇野柏里『井波誌』町立井波図書館館友会、1937年)51頁、61頁)。

¹⁵ 天明4(1784)年も8月22日から28日であるが、天明6(1786)年には8月3日から9日までとなっている(「瑞泉寺太子伝会之来歴」宇野柏里『井波誌』町立井波図書館館友会、1937年、60~61頁)。また例年6月下旬であったところ、文久元(1861)年は8月4日から10日までに延引している。(文久元年8月付「太子絵伝虫干延引執行に付縮方仰せ付け願書」井波町肝煎文書192-3、南砺市立井波図書館所蔵)。

¹⁶ 林雅彦・犬飼隆・牧野和夫・渡浩一「瑞泉寺大谷支院吉沢師藏『聖徳太子伝記』(林雅彦・渡邊昭五・徳田和夫編『絵解き一資料と研究一』三弥井書店、1989年)91頁。

市伏木)まで運び、そこから北海廻りで大坂まで船で運ぶ計画が立てられた。

…その際、中心となったのが越中国の東派御坊である井波御坊と城端御坊（城端別院善徳寺、富山県南砺市）。

- ・ 寛政4（1792）年閏2月15日：城端御坊は、材木や用米の運送に際して使用を許された日の丸船印旗を拝領している。
- ・ 同じ頃、井波御坊にも日の丸旗は到来した。加賀藩や流路にある十村など村役人の許可を得た上で、寛政4～5年に運送された。その際、杣人などの夫食米を出したのが越中国の門末であり、その夫食米はすべて城端御坊の主導で取り集めて届けられた。
- ・ 寛政10（1798）年秋：その功績によって、城端御坊は達如筆十字名号を賜わっている。
- ・ 寛政7（1795）年：羽前国庄内藩（山形県）の後谷という山地から最入門徒の寄進による用材運搬の様を描いた「寛政度用材運搬図屏風」（東本願寺所蔵）にも日の丸旗がみえる。

■『二十四輩順拝図会』享和3（1803）年刊行

近年の東本願寺再建の時、用木を飛騨国の山から切り出す時に、巨木をことごとく雄神川（庄川）へ伐り落して、越中国から運送して、やすやすと都に登らせて、御堂を造立できたのは、門下の男女が心を尽くしたことと、この雄神川のよい流れのおかげである¹⁷。

7. 太子巡回と絵解き僧

【「お太子さまご巡回」『ひだご坊』2021年11月号、真宗大谷派飛騨御坊真宗教化センター】

8. 南無仏太子像の安置

【「地域真宗史フィールドワーク報告 富山県西部における聖徳太子信仰」『真宗』2020年2月号】
…「一、野にある南無仏太子」「おわりに」

おわりに

本報告を通して、本山－御坊・別院－一般寺院・門徒という真宗教団と、宗派の枠組みを超えた地域社会と、両面の結節点として、太子信仰を基盤とする井波瑞泉寺が存在してきたことが確かめられた。

¹⁷『二十四輩順拝図会』前編卷之3「郭竜山善徳寺」（『日本名所風俗図会』〈諸国の巻Ⅲ、角川書店、1980年〉351～352頁）。



念じられ 照らされて

お太子さまご巡回

松金直美

聖徳太子信仰の盛んな浄土真宗の集落や寺院とが、各地にあります。それはご開山・親鸞聖人の太子信仰によるものとみられます。

『親鸞伝』によれば、一〇三(建仁三)年四月五日、親鸞聖人は六角堂で救世菩薩の夢告を受け、多くの人々に念仏の教えを説いていこうと決意されました。この救世菩薩の化身が聖徳太子と言われています(『真宗聖典』七二五頁)。太子は、親鸞聖人を民衆教化に導いた存在でもあったと伝えられています。

と、太子を敬っていた親鸞聖人の姿勢に、真宗の教えに生きる人々は導かれ、太子を信仰し続けてきました。井波別院瑞泉寺(富山県南砺市井波)は、篤い太子信仰を伝える寺院の一つとして知られ、開基である本願寺第五代の綽如上人(一二三〇〜九三)が、後小松天皇からいただいたという聖徳太子絵伝と南無仏太子像を所蔵しています。また江戸時代、弁才に勝れた瑞泉寺十二世応現院真照(二六九五〜一七四四)が、虫干に際して太子絵伝の絵解きをしたことに始まるという太子伝会を、現在も毎年七月下旬に行

なっています。明治となった一八七九(明治十二)年九月一日、香部屋からの出火によって、瑞泉寺は全焼してしまいます。その再建へ向けての費用を勧募するため、それまで門外不出であった太子絵伝や南無仏太子像を各地に巡回し、絵解きや開扉がなされました。「お太子さまご巡回」とも呼ばれ、毎年二月から三月にかけての農閑期に行われてきました。最盛期の一九五七(昭和三十二)年には八十九カ所に及び、井波近隣や砺波地域のみならず、富山市や射水市、小矢部市、石川県の旧羽咋郡や旧石川郡そして金沢市周辺、さらには遠く福井県南条郡今庄町あたりまで、門信徒からの要望を受けて巡回されました。

この「お太子さまご巡回」や瑞泉寺での太子伝会の際に活躍した絵解き僧として知られる人物に、吉澤孝譽師(一九〇四〜九二)がいます。吉澤師が初めて「お太子さま」のお供をしたのは、一九二五(大正十四)年八月二十日頃に飛騨の明善寺(岐阜県大野郡白川村萩町)へ赴いた時です。遠い道中のため、馬に乗って行ったそうです。瑞泉寺の太子信仰は、門信徒らの求めに応じ、絵解き僧によって遠く飛騨の地にも伝えられたのでした。村から村へ巡回されたお太子さまの御座は、どこも満堂の参詣でした。自らの住む集落で太子の法宝物を迎えた人々は、仏教興隆に努めた太子の来歴を絵解き僧から聴聞することで、仏教の歴史のただなかにあることを実感できたのではないのでしょうか。

このように、語られたものを聞き伝えることでも、仏教は伝灯されてきました。私たちが様々な念仏の教えに出あったことを、各地に巡回されてきた「お太子さま」への信仰を通して気付かされています。



＜略歴＞
1979年、富山県氷見市生まれ。真宗大谷派教学研究所研究員、同朋大学仏教文化研究所客員所員、大谷大学非常勤講師、龍谷大学非常勤講師。高岡教区第7組安専寺衆徒。真宗大谷派擬講。

子ども向け真宗バラエティ番組「ごぼうチャンネル！」

第6回放送内容をYouTubeで配信開始！過去の放送もご覧いただけます。

アクセスはこちらから→

ヒットネットTVでの次回(第7回)放送は12月。お楽しみに!!

ひだご坊 一口法話

URL: <https://hidagobo.jp/sermon/>

11月1日から30日の期間は右の方々の法話を随時掲載してまいります。

- ・三島多聞氏 (別院輪番)
- ・四衢亮氏 (不遠寺住職)
- ・内記浄氏 (往還寺住職)
- ・北條秀樹氏 (丁泉寺住職)

11月28日 午後1時から

別院定例法座

親鸞聖人ご命日法座

講師 櫻居和彦氏 (西光寺住職)

講題 「ともに浄土への道を歩みましょう」

高山別院報恩講 子ども作品展

十月二十二日から十一月三日まで、高山別院本堂では報恩講子ども作品展の作品が展示されています。今年も書道塾、教室、個人より小学生の書道と絵画作品二百七十五点が出品され、左記の通り各賞の入選が決まりました。受賞者の方々にお祝い申し上げますとともに、ご参加くださった皆さま方に御礼申しあげます。

本年も、コロナ禍の影響を鑑みて表彰式はございませんが、別院報恩講にお参りの際にどうぞご覧ください。

【飛騨御坊賞】
高田紗那(小五)・橋爪なつめ(中三)

御坊報恩講

念仏の道

- 【金賞】
河合彩芭(小一)・村田知彩(小二)・圓山晴羅(小三)・松井敦史(小三)・吉田さわ(小四)・小池沙奈(小四)・今井純鈴(小五)・野中千陽(小五)・辻彩恵子(小六)・長瀬遥翔(小六)・奥村怜禾(中一)・坂尻蒼空(中二)・松永彩花(中三)
- 【銀賞】
藤井晴希(小一)・籠戸ひかり(小二)・林恋世美(小二)・中丸詩野(小三)・中島快(小三)・渡瀬智世(小四)・倉畑絢(小四)・天木葵(小五)・金山仁知花(小五)・松尾寛介(小六)・近藤暖乃(小六)・松森瑞帆(中三)・宇田暖菜(中三)
- 【銅賞】
山越鼓哲(小一)・平畑柚葵(小二)・森下結唯(小三)・高畑大知(小三)・杜腰恋雪(小四)・林菜依子(小四)・北村優芽(小四)・都竹千晶(小五)・島田遥真(小五)・丸田美智(小五)・田腰唯大(小六)・田中大雅(小六)・松山孟功(小六)・今井菜月(小六)・杉山二郎(中一)・中丸結衣(中二)・住姫穂(中三)・野原久遠(中三)
- (以上、敬称略)

amrta

銭百疋を代わりに奉納しました。そしてその折、同年三月に行われた遷座供養会の法要を描いた絵図や、東本願寺御堂上棟の場面を描いた絵図を、「御堂前通り」にて購入し、お土産にしています。また真宗道場を営んでいた、越中国射水郡葛葉村(富山県氷見市)に所在した名苗家の、近世後期から近代にかけての当主は代々、東本願寺参詣などのために上洛した折には、京都にて仏教書を購入して持ち帰っていました。本山に参詣できた真宗

門徒は、本山にて仏法を聴聞できた喜びを、絵図や書物のお土産と共に、参詣できなかつた国元の人びとへ語り伝えたことでしょう。赤尾の道宗が勧めたような、門徒・末寺―御坊(別院)―本山をつなぐ真宗門徒の生活は、近世、近代へと着実に継承されてきたことで、真宗の教えは地域や時代を越えて伝えられてきました。

山ほど近くに生活させていたでいます。それにも関わらず、日々の慌ただしさの中で、仏法に出会い味わう機縁をのがしているのではと、心許なくも感じております。現代に生きる私たちが、真宗門徒としての生活のあり方について、あらためて問い直すきっかけを本条は与えてくれるように思います。

(教学研究所助手・松金直美)

「震災と原発」問題研究班

東北三県(岩手・宮城・福島)フィールドワーク報告(八)

東日本大震災から丸四年。教学研究所では、今年も三月十一日にあわせて、岩手県・宮城県・福島県、それぞれの現地を訪問し、「震災と原発」がもたらした問題についての調査研究、学びを継続している。

今号から数回にわたり「大震災から四年・現地フィールドワーク」について報告する。

仙台・海楽寺「三・一一」を心に刻む集い

東日本大震災から丸四年経った三月十一日、宮城県仙台市井土浜の海楽寺(仙台教区仙台組)を訪ねた。その日、海楽寺では、大震災から三年をかけて再建された新しい本堂に、およそ五十人の方が集まり、「三・一一」を心

に刻む集い」が開かれていた。

四年前、大地震にともなう大津波によって海楽寺の本堂・庫裡は全壊、地域(井土浜)全体が壊滅的な打撃をうけ、多くの家々が流され、たくさんの方が亡くなられた。その地でお寺を再建することには相当の苦悩があったことと思われるが、震災で亡くなられた前住職のあとを継いだ大友雄一郎ご住職は、『海楽寺復興記念誌』に次のように記しておられる。

「多くの門徒が被災し、苦しい生活を強いられている中、寺の存続について正直悩んだこともありましたが、瓦礫の中できれいな花を咲かせている桜の木を見て、その場所で自分の役割を精一杯果たすこ

との大切さに気付かされました。バラバラになつてしまつた門徒の方々が集える場所をつくること、そして多くの苦しみを抱えた方々の思いを受け止めることなど、寺としてやるべきことがはっきりと見えた」(以下略)

また、同じく『記念誌』に海楽寺総代長の丹野幸志氏は、

「当時は瓦礫の山に埋もれ、途方に暮れた日々でしたが、全国の皆様から寄せられた温かい励ましやボランティアの皆様への支援活動に勇気づけられたことが思い出されます。三十六名もの人達が亡くなったこの地だからこそなんとしても再興したいという住職の並々ならぬ決意、そして総代や門徒の再建への強い思いが今日に至つたものと思います」(以下略)

と書いておられる。再建まもない海楽寺の本堂に入れていただき、参集の皆さんと一緒に

教研だより

107

教学研究所

真宗入門

amrta

アマリタ

大信心はすなわちこれ、
長生不死の神方(教行信証)「信巻」

『蓮如上人御一代記聞書』に学ぶ(第二十五回)

第四十五条

あかおの道宗、もうされそうろう。「一日のたしなみには、あさつとめにかかさじと、たしなめ。一月のたしなみには、ちかきところ、御開山様の御座候ところへまいるべしと、たしなむべし。一年のたしなみには、御本寺へまいるべしと、たしなむべし」と云々

〔真宗聖典〕八六四頁

(現代語訳)

赤尾の道宗が、次のように述べたと伝えられています。「毎日、お朝事の勤行を欠かさないう心がかげましよう。毎月、近くの「御開山様」(親鸞聖人御影)が安置されている場所へ参詣するよう心がけましよう。毎年、御本山へ参詣するよう心がけましよう。」

赤尾の道宗とは、蓮如上人の晩年の弟子として知られる人物です。越中国赤尾(富山県南砺市)の浄徳の甥で、若い頃には弥七(または弥七郎)と名のつていました。二十代で仏法に心をかけるようになり、当時、京都山科にあった本願寺へ参詣するようになりました。年に二、三度は上洛して蓮如上人のもと

へまいり、当流の安心について聴聞していました。しかし、それを国元で勧めても、聞き入れてくれない人もいたため、蓮如上人へ安心の趣意を文に記して欲しいと依頼し、その御文を持ち帰っています(明応五年後二月二十八日付蓮如上人御文)『諸文集』・『拾塵記』／『真宗史料集成』第二巻所収)。そこには、蓮如上人の

説く真宗の教えを、越中の地へ届けたいという願いが感じられます。

この赤尾の道宗が、真宗門徒のあるべき姿として、毎朝のお勤め、月に一度は「御開山様」、つまり親鸞聖人御影の安置されている寺院へ参詣し、年に一度は本山である本願寺へ参詣する生活を提唱したと伝えるのが本条になります。

道宗の在世中、赤尾から最も近くに安置されていた親鸞聖人御影として確かめられるのは、井波別院瑞泉寺(富山県南砺市)に伝来する影像です。文明元(一四六九)年七月二十八日付で、蓮如上人の次男であり、瑞泉寺第三代に数えられる蓮乗に宛てて、蓮如上人から授与された御影です(井波別院瑞泉寺誌)。道宗は毎月、山深い赤尾から、三十キロメートルを越える道のりを経て、井波の瑞泉寺へ参詣に通っていたのではないでしょう

か。京都から遠方に住む一般の真宗門徒にとつて、本山への参詣は、数年または一生に一度、経験できるかどうかの悲願であったことでしょう。諸国に住む真宗門徒の本山参詣は、時代が下るにつれて、交通の利便性が向上することも影響して、しだいに浸透していききました。道宗の時代から三百年あまりのち、駿河国興津宿(静岡市清水区)に住んでいた東本願寺門徒の深津八郎左衛門は、天保六(一八三五)年五月に東本願寺へ参詣した際、母が本山への賽銭として日々ためていた